

教育長 様

校番 51 安古市 高等学校長
(全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書**

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

校訓『仰高』の精神のもと、高い志を掲げ、これからの社会に貢献できるリーダーを育成します。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

- ① 高い志の実現に向けて、主体的に学び続けることができる生徒の育成
- ② 自他を愛し、社会の一員として自覚と責任を持ち、自ら考え行動できる生徒の育成
- ③ 持続可能な社会の担い手として、国内外の異なる価値観を持つ人と協働できる生徒の育成

これを実現するために、次の3つの資質・能力をあげる。

ア論理的・批判的思考力 イ伝える力・表現力 ウ他者と協働する力

(3) 学科等の特色

本校は普通科高校として、特定の教科に特化することなく、すべての教科で ①知識及び技能の習得 ②思考力・判断力・表現力等の育成 ③学びに向かう力・人間性等の涵養に努めるとともに、総合的な探究の時間を中核として教科横断的な学びを促進し、持続可能な社会の実現に向けたSDGs17の目標実現を見据えた教育活動を展開する。その中で、生徒が本校で学ぶ意義を見出し、諸活動に主体的・自律的に取り組むことで、「高い志を掲げ、これからの社会に貢献できるリーダー」としての資質・能力養うことができる高校、県をリードする高いレベルの普通科進学校であり続けることを特徴とする。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

普通科高校として、「総合的な探究の時間」を中核に据えたカリキュラム開発の重点目標は、「主体的・自律的な学習者の育成」と考えている。そのために、

- ① 上記ア～ウを中心とする資質・能力を、学力3要素の観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等）から定義づけを行う。
- ② ①の定義に基づいて、「総合的な探究の時間」の全体指導計画を見直し、毎時間の目標設定を明確にする。
- ③ 資質・能力に基づいて、ルーブリック・評価規準を作成する。
- ④ 指導・助言者からアドバイスをいただくとともに、計画的に校内研修を開催し、組織的な取組とする。
- ⑤ ルーブリック・評価規準に基づいて、単元指導計画及び評価計画を作成する。
- ⑥ 指導と評価の一体化を念頭に置き、教員のファシリテーターとしての指導力を向上させる。
- ⑦ ここまでの取組を汎用的に各教科指導に拡張していく。
- ⑧ 指導・助言者をはじめ、生徒や保護者のアンケートや学校運営協議会等からの外部評価を受け、研究の方向性や方法についての改善を図る。

(2) 3年後の目指す学校の姿

- ① 総合的な探究の時間の内容と教科学習が有機的にリンクし、生徒一人ひとりが社会の諸問題について自らの探究テーマを深めるために、各教科学習や本校での学びの必要性を理解し、より主体的・自律的な学習者として生き生きと本校の諸活動に取り組んでいる。
- ② 各教科学習においても、課題発見・解決型、探究型の授業を実施するとともに、毎時間の目標と評価を明確し、

ポートフォリオを活用するなど、自らの学びを振り返り、一人ひとりが意欲的に学びに取り組むことができている。

- ③ 総合的な探究の時間では、SDGs 17の目標の視点から生徒が探究テーマを設定し、書籍やインターネットだけでなく、地域社会におけるフィールドワークやインタビュー、大学や企業、同窓会からの指導や支援など、関係機関と連携の上、自分事として探究活動を進め、解決策や最善解を具体的に提案できるなど、今以上に深い学び・探究活動ができている。
- ④ 進路実現については、自らの探究テーマをさらに深め、目的意識を持って教科学習に取り組み、学力が向上する。また、具体的な進路目標の実現を目指す生徒が増加し、学校の魅力化につながっている。

(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・総合的な探究の時間で育成を目指す資質・能力を明確化し、厳密な定義づけができている。
- ・資質・能力に基づいてルーブリックを作成し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価できている。
- ・「総合的な探究の時間」の全体計画を見直し、毎時の目標設定を明確にしている。
- ・計画的に指導・助言者からのアドバイスをいただくとともに、校内研修を開催し、課題発見・解決学習を推進している。
- ・総合的な探究の時間における、ここまでの取組を汎用的に各教科指導に拡張する。
- ・ルーブリックに基づいて、指導計画、評価計画(シラバス)を作成している。
- ・総合的な探究の時間を中核とし、資質・能力の視点から各教科や特別活動を含めた教育活動全体のカリキュラムマップを作成している。
- ・ポートフォリオを導入し、自己の学びを振り返らせている。
- ・生徒指導の三機能を生かした指導を行っている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・生徒アンケートで、総合的な探究の時間を通して「本校における教科学習の必要性を認識できたか」という質問項目に対する肯定的回答が60%以上。
- ・総合的な学習の時間を通して、探究の「意義・価値の理解」、「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」、「持続可能な社会へ貢献しようとする態度」に関する平均値が3.2以上。（4点満点）
- ・生徒アンケートで、「資質・能力が身に付いたか」という質問項目に対する肯定的回答が60%以上。
- ・生徒アンケートで、授業後の「興味・関心の向上」、「学力や技能の向上」に関する肯定的回答の割合が80%以上。
- ・学びの基礎診断の指標である記述問題の得点率ランクがA以上である生徒の割合が50%以上。（現1年：国59%、数21%、英38% 2年：国40%、数15%英59%）
- ・本校での学びを通して、「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定の場と自己の可能性の開発」に関する自己評価における肯定的回答が3.2以上。（4点満点）
- ・難関大を含む国公立大合格数年間200名以上、
（その他民間テストを活用した評価など）

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」

イ カリキュラム開発の概要

マクロレベルでは、新学習指導要領に基づき、「総合的な探究の時間」を中核に据えたカリキュラム開発を行っていくが、これを各教科学習に汎用的に拡張することで、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、各教科等において「思考力・判断力・表現力」をはじめとする学力3要素の向上に向けた質の高い授業づくりを推進する。

- ① 「総合的な探究の時間」で育成を目指す資質・能力をベースとする教科横断的学びの実現（カリキュラムマップの作成）
- ② 新学習指導要領に基づく各教科の単元指導計画の作成
- ③ 課題発見・解決学習、探究型学びの推進

ミクロレベルでは、質の高い授業づくりを推進するために、11月に研究授業や互見授業を通して、成果と課題を明確にするとともに、年2回（7月、12月）の生徒による授業評価アンケートを通して、各教科で改善策を検討していく。その際の視点は次のとおりである。

- ① 指導内容の精選、発問・活用問題の工夫・改善、教材開発
- ② 授業とリンクした予習・復習、課題を通じた教科学習内容の確実な定着、ポートフォリオを活用した自己評価

③ ICTの有効活用におけるデジタルシチズンシップの視点からの取組

④ 令和4年度用シラバスの作成

ウ 校内体制

カリキュラム開発を、全教員が参画し、組織的・計画的に進めていくために、実行委員会（推進指定校プロジェクト、構成メンバーは校長、教頭、主幹教諭、教務主任、教務部員1名、企画研修部主任、企画研修部員1名、進路指導主事の8名）を中心に議論し、その結果や研究の方向性を逐次校務運営会議や教科主任会議で報告し、各分掌会や学年会、教科会において、共有と意見の吸い上げを行う。また、各教科での取り組む内容について各教科会議で十分に協議し、その内容を教科主任会議で報告させ、それを踏まえてカリキュラム開発を進める。

(5) 学習評価

定期考査において、全教科・科目で全配点の10%程度の活用問題を出題する。その際、出題の意図やループブックを作成し、生徒の解答状況を把握するとともに、活用問題がループブックに掲げた資質能力を測るものになっていたか検討する。また、これにより、教員が指導と評価の一体化に対する意識を高め、「単元の指導計画」の作成と不断の見直しを通して、観点別評価が実効性のあるものとなるようにするとともに、生徒の学習指導の改善を図る。また、学びの基礎診断の指標である記述問題の得点率ランクがA以上である生徒の割合からも評価する。

総合的な探究の時間では、各単元において到達目標を提示し、生徒の学習状況を到達目標の観点から見取り、次の活動に向けて改善すべき点を生徒に提示していくことで、内容面だけでなく意欲の面でも形成的評価に資するようにする。また、活動後は、生徒にとってわかりやすい表現でアンケート方式による自己評価（4段階）を行う。その項目をどのようにするかを検討することも研究課題の一つである。そして、生徒の自己評価や相互評価と教員による評価の差異を見取ることで、個々の生徒にとっては次の活動での留意点を形成的に提示するとともに、到達目標や指導の適切さを評価することでPDCAサイクルを回すこととする。さらには、それらの評価を統合的に捉えることで、年度末の総括的評価につなげていく。このような指導と評価の一体化は総合的な探究の時間だけにとどめず教科学習にも適用させることで、生徒自身が主体的・自律的に学習の取り組んでいけるようにする。GPS-Academicについては、2月に実施結果を基に、Benesseの担当者から本校生徒の特徴と課題を解説していただくとともに、3月に職員研修で共有するとともに、次年度に向けての課題を明確化する予定である。

(6) カリキュラム評価

マクロレベルでは、年2回の授業改善アンケート及び学校評価アンケートをもとに、プロジェクト推進委員会を中心に評価する。また、総合的な探究の時間では、1年生の探究基礎としてのレポートまとめやディベート、2年生によるポスター発表会（1月）、3年生によるパネルディスカッション（9月）を通して、カリキュラムが生徒の資質・能力の育成にとって有効であったか否かを、生徒の自己評価を含めて評価する。その際、指導・助言者や学校運営協議会からも、校内における評価の妥当性やカリキュラム改善に向けての意見を聴取し、カリキュラム改善に反映させていく。

ミクロレベルでは、単元ごとの評価を実施するとともに、一人一人の生徒の評価がどのように変容したかというところを見取り、教科面談等を通して、今後の学習改善に役立てることとする。

また、上に述べたような評価を着実に実行していくための評価方法についても研究していくこととする。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

6月に指導・助言者である広島大学大学院人間社会科学研究科の教授 草原和博氏を招聘し、研究の進め方についての指導・助言をいただいた。7月に、職員研修において、取組みの概要を共有した。その内容は主に、観点別評価、単元指導計画、単元テンプレートの意義及び具体的な作成方法であった。8月に、各教科で作成した単元指導計画や単元テンプレートを教職研修で共有するとともに、この間にプロジェクト会議で作成した育成したい資質・能力の定義付け、マスターループブックの概要説明及び意見交流を行った。10月以降、11月の研究授業（「総合的な探究の時間」単元名ディベート）の実施に向けて、1学年会において指導案の検討を行い、11月に研究授業として全教職員が参加しての研究授業及び研究協議会と実施した。さらに、職員会議において、汎用的思考力測定ツールであるGPS-Academicについての研修を行った。3月の職員会議で実施した結果について共有する予定である。

総合的な探究の時間における単元「ディベート」の実施前後において育成したい3つの資質・能力のうち「論理的・批判的思考力」と「他者と協働する力」についての生徒の自己評価による方法でレベル1からレベル4の4段階で実施したところ、「論理的・批判的思考力」で平均2.97→3.15、「他者と協働する力」で平均3.15→3.35と高いものとなっていた。ディベートを通して、根拠を明確にして考えることができるようになったり、論理的・

批判的に思考することでメリットやデメリットなどを多角的に考えるようになったりしたものとする。生徒が自由に記述したものには、次のようなものもあった。

- 自分の身の回りにある社会問題の問題点を明確にして解決策を批判的に議論できるようになったと思う。
- 今まで発言に理由はあっても根拠がなかったりしたけどディベートを通して自分で調べたりして発言をより確かなものにするようになった。
- 自分一人では出てこなかった考えも複数人で考えることで掘り出すことができた。いろんな面から問題を考えることができるようになったのでその根拠を示すことができればもっといいと思いました。
- 一つの物事でも視点によっていろいろな見え方をするということができるということに気づくことができました。また、班の人と協力して立論を考えたので、自分の考えをさらに深めることができました。

さらには、同じ時期に実施された数学Ⅰの「データの分析」におけるデータ（根拠）からどのようなことがいえるか（主張）を考察させる授業において、生徒たちはどのように考えたのか（論拠）を確認しながら考察を進めていった。これは例年にはないことであり、総合的な探究の時間での学びが他の教科に敷衍したものと考え、このことから、この指導が有効であったと考えられる。

本年度のアウトカム（成果目標）については、次のとおりである。

- 生徒アンケートで、総合的な探究の時間を通して「本校における教科学習の必要性を認識できたか」という質問項目に対する肯定的回答が60%以上→79.1%（目標達成）
- 総合的な探究の時間を通して、探究の「意義・価値の理解」、「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」、「持続可能な社会へ貢献しようとする態度」に関する平均値が3.2以上。（4点満点）→3.1（全学年の平均で、目標には達していない）
- 生徒アンケートで、授業後の「興味・関心の向上」、「学力や技能の向上」に関する肯定的回答の割合が80%以上→「興味・関心の向上」84.8%、「学力や技能の向上」→82.6%（いずれも目標達成）
- 本校での学びを通して、「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定の場と自己の可能性の開発」に関する自己評価における肯定的回答が3.2以上。（4点満点）→3.4（目標達成）
- 難関大を含む国公立大合格数年間200名以上168名（前期日程の判明分まで、3月10日現在）

以下の項目については、現在生徒アンケート等の集計中であつたり、今後実施したりするものであるため、現時点で評価することはできない。

- 生徒アンケートで、「資質・能力が身に付いたか」という質問項目に対する肯定的回答が60%以上。
- 学びの基礎診断の指標である記述問題の得点率ランクがA以上である生徒の割合が50%以上。（現1年：国59%、数21%、英38% 2年：国40%、数15%、英59%）

また、汎用的思考力測定ツール「GPS-Academic」の結果の総合結果で、協働的思考力がレベルA以上の生徒の割合は43%と高かったものの、創造的思考力がレベルA以上の生徒の割合は22%は低かった。教科学習においてもペアワークやグループワークを多く取り入れている結果であるとする。

(2) 課題

研究授業後の協議会において、次の2点が指摘された。このことは、今後に向けての課題である。

- ①発表の仕方、伝える工夫には欠ける。原稿を見ながら発表するなど、観戦者に伝えるような発表はできていなかった。
- ②準備をしている立論、質問は論理的に説明できていたが、反駁については不十分であった。相手の根拠の曖昧さを指摘できなかつたり、論点のずれた反駁をしたりしていた。

一方、生徒アンケートで、総合的な探究の時間を通して「本校における教科学習の必要性を認識できたか」という質問項目に対する肯定的回答は、98%であった。

資質・能力に係る生徒アンケートで、①「論理的思考力の資質・能力が身に付いたか」、②「伝える力・表現力の資質・能力が身に付いたか」、③「他者との協働力の資質・能力が身に付いたか」という質問項目に対する肯定的回答は、それぞれ、97%、96%、98%であった。量的なデータとしては非常に高く出ているけれども質的な分析はできていないので、次年度は、質問の内容を再考し、記述の回答も書かせるようにする。

総合的な探究の時間を通して、「探究の意義・価値の理解」、「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」、「持続可能な社会へ貢献しようとする態度」に関する平均値が4段階評定で3.2であった。「探究の意義・価値の理解」・「持続可能な社会へ貢献しようとする態度」については、3.4と高かったが、「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」についてはいずれも3.1と低めであった。「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」については、次年度から副教材として使用する「課題研究メソッド 2nd Edition（啓林館）」を用いて、年度当初から学習させてこととしている。

総合的な探究の時間では、各単元において到達目標を提示し、活動後は、アンケート方式による自己評価（4

段階)を行い、次の活動での留意点を形式的に提示し、到達目標を基に評価することでPDCAサイクルを回すこととすることにしていた。しかし、今年度は、各単元のルーブリックを作成して到達目標を提示するに止まっており、次年度、どのようにPDCAサイクルを回し、段階的に資質・能力を育成していくのかを検討していきたい。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット (活動指標)

- 本校で育成したい3つの資質・能力「論理的・批判的思考力」、「伝える力・表現力」、「他者と協働する力」についてのマスタールーブリックを不断に見直ししている。
- 生徒及び教員がマスタールーブリックを意識した学習及び指導を実施し、レベルの向上を図っている。
- ルーブリックに基づいて、指導計画、評価計画(シラバス)を作成している。
- 総合的な探究の時間を中核とし、資質・能力の視点から各教科や特別活動を含めた教育活動全体のカリキュラムマップを作成している。
- ポートフォリオを導入し、自己の学びを振り返らせている。
- 生徒指導三機能を生かした指導を行っている。

イ アウトカム (成果目標)

- 「本校における教科学習の必要性を認識できたか」という質問項目に対する肯定的回答が70%以上。
- 総合的な探究の時間をとおして、探究の「意義・価値の理解」、「課題設定」、「情報収集・整理・分析」、「まとめ・表現」、「持続可能な社会へ貢献しようとする態度」に関する平均値が3.3以上。(4点満点)
- 「資質・能力が身に付いたか」という質問項目に対する肯定的回答が70%以上。
- 生徒アンケートで、授業後の「興味・関心」、「学力や技能の向上」に関する肯定的回答の割合が3.3以上。
- 学びの基礎診断の指標である記述問題の得点率ランクがA以上である生徒の割合が55%以上。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

生徒の資質能力の向上と主体的・自律的な学習者の育成、そして地域から期待され信頼される学校づくりに向けて、令和3年度に引き続き、「総合的な探究の時間」を中核に据えたカリキュラム開発を行っていく。但し、これを各教科学習に汎用的に拡張することで、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、各教科等において「思考力・判断力・表現力」をはじめとする学力3要素の向上に向けた質の高い授業づくりを推進する。そのために、令和3年度に十分にできなかったことを中心に以下の点を進めていく。

- ① 「総合的な探究の時間」で育成を目指す資質・能力をベースとする教科横断的学びの実現(カリキュラムマップの作成)
- ② 目標と指導・評価の一体化を明確にした授業の実践
- ③ 課題発見・解決学習、探究型学びの推進
- ④ ICTの有効活用におけるデジタルシチズンシップの視点からの取組
- ⑤ 指導内容の精選、発問・活用問題の工夫・改善、教材開発
- ⑥ 授業とリンクした予習・復習、課題を通じた教科学習内容の確実な定着、ポートフォリオを活用した自己評価

イ 校内体制

令和3年度に引き続き、カリキュラム開発に全教員が参画し、組織的・計画的に進めていくために、実行委員会(推進指定校プロジェクト)を中心に議論し、その結果や研究の方向性を逐次校務運営会議や教科主任会議で報告し、各分掌会や学年会、教科会において、共有と意見の吸い上げを行う。特に、教科横断的な視点に立って、各教科でのどのような内容をどのように取り組んでいくのか、また、その結果に係る成果と課題について、各教科会議で十分に協議し、教科主任会議で報告させ、それを踏まえてカリキュラム開発を進める。実行委員会(推進指定プロジェクト)の構成メンバーについても、カリキュラム開発の中核である総合的な探究の時間を所管する企画研修部員の動員やICTの有効活用の視点からICT主担当者を加えていきたい。また、実施に当たって、これまでの大学や同窓会と連携するとともに、産学連携や新たな連携の可能性を含め、生徒の深い学びにつながるよう連携の在り方を工夫・改善していく。